日本の葬送儀礼の比較研究

本林靖久

一　はじめに―現代の葬墓制をめぐる問題―

現代の葬送儀礼は、遺骨をどのように処理または保存するかが大きな問題となっている。特に都市部を中心に火葬の普及による遺骨の問題は、一方で墓地不足という現実的な問題とあいまって大きな社会問題にまでなっていると言えよう。

また、近年の「散骨」と呼ばれる遺骨を灰にして海や山に撒くと言った自然葬への関心は、墓の在り方、葬送の在り方、しいては日本人の死生観が問われているものと思われる。

このような葬送儀礼の問題を日本民俗学では、霊肉分離、死穢忌避、遺骨尊重をキーワードとして、墓制を「遺骸や遺骨を葬った葬地であるとともに、また、その霊を祭るための祭地」と定義し、「葬地」と「祭地」から区別してきた。その観点に立って、葬地の地上に石塔を建てて祭地とするのが単墓制であり、葬地と祭地を別個にするのが両墓制と呼ばれている。特に死の民俗を考えるうえで、この両墓制の形態は、日本人古来の死穢忌避の観念、あるいは、肉体と霊魂とは別にする観念を具現化している墓制として注目されてきた。

そこには葬送儀礼を霊魂と肉体という二元的構図から捉えようとしてきたことがうかがえる。しかし、現代の葬墓制を考えるにあたっては、遺骨つまり骨という問題を含めた霊魂、肉体、遺骨の三元的な立体構図のなかで考察することが重要であると考えられる。

二　納骨儀礼と祖先崇拝

例えば、今日の墓ブームのアンチテーゼと言われる無墓制を葬地と祭地という視点で捉えると、その形態の本質が明らかにされないのではないかと思われる。無墓制とは、「遺体の埋葬地や火葬地［葬地］はあるものの、遺体や遺骨が放置され、そのうえ、墓碑を立てて遺骸、あるいは遺霊を祭る祭祀供養［祭地］を持たない制度」と捉えられている。

そして、現状としてこのような無墓制の形態をとっている真宗門徒の墓制を、両墓制との比較のもとに、両墓制の他宗派壇家に見られる石塔［詣り墓］の代わりが、真宗門徒の場合では、各家の仏壇や手次寺の本堂であると指摘されてきた。特に真宗の無墓制は寺院の本堂を『集合詣り墓』として捉え、これは真宗が従来の墓制を内容的に踏襲しながら、伝承的な教義に合致する形態を与えたことによるものであると考えられてきた。

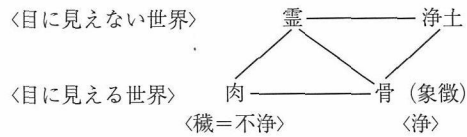
しかし、現実に見られる無墓制の形態には、真宗の伝承的な教義とともに、本山納骨あるいは手次寺納骨の儀礼とが結びついたことが最も大きな要因と言えるのである。

つまり、死者の遺骨を奉安したいという欲求を手次寺納骨や本山納骨という方法で昇華させることができなければ、無墓制が今日まで存続したかどうかは疑問なのである。実際の無墓制門徒にみられる納骨儀礼は一度納めてしまえば、その時点で完了してしまう行為である。しかし、門徒の遺骨を納める行為と本山の遺骨を受け取る行為が存在するなかで、遺骨は現世と来世（浄土）との交流を約束する交換関係として意識され、盆や彼岸の祭祀の度

に更新される継続的な関係を取り結んできたと考えられる。そこには、納骨の儀礼が祖霊（霊魂）の信仰を内在させていると思われるのである。

これに対して、両墓制の本質は、あくまで霊魂と肉体の分離ということにあり、その中心課題は死者の霊魂の問題であると言える。そこには骨についての有意味性を明らかにするような視点はなかったと言える。しかし、納骨という問題、そして、今日の遺骨を安置する場所を求めるがゆえの墓ブームや散骨という問題を考えるとき、骨という問題を避けることができないと言えよう。

《図1》



三　骨からみる墓制

そこで、現代の死をめぐる習俗、葬送儀礼を考えるにあたっては、霊魂・肉体・遺骨という三元的な視点のもとで、骨を通して墓制を見ていく視点を考察してみる必要があるのではないかと思われる。《図1》参照。

特に墓ブームに見られる遺骨への信仰は、かならずしも骨そのものを崇拝するのではなく、遺体を極度に圧縮した強固な遺存物として、霊魂という目に見えない不可視な存在が穢（不浄）から浄へと推移する過程を、集約的に象徴していると言える。

そして、霊魂や仏教で説く浄土はいうならば〈見えない世界〉であり、日本人一般の〈見える世界〉とは遺骨であり、その骨を安置する墓であると言える。現代人の死後観の変化は、〈見えない他界〉が後退し、〈見える他界〉への関心の増大となって現れてきていると言える。このことは墓制の変化にも繋がっており、骨をどのように処理し保在するかが見えない霊魂を見えない浄土の世界へおくる手がかり、あるいは手段となっていると思われる。

四　おわりに―これからの葬送のあり方をめぐって―

さて、現代の葬送儀礼を墓の形態から捉え、骨を中心にすえて考察してきたが、今後の課題を述べておきたい。一つには、墓の歴史的な変遷を通時的に見るとともに、遺骨を尊重する観念の系譜を明らかにすることである。特に納骨の意味を歴史的に捉えて行くことは重要なことであると思われる。例えば、真宗の納骨の問題については、中世における死体遺棄制と真宗門徒の火葬の習俗との関係、そして遺骨を祖廟に納骨する儀礼がどのような歴史的・文化的背景のもとで、地方の門徒に布教され、受入れられていったのかについて明らかにしていく必要があると言えよう。そのうえで遺骨を本山に納骨することにどのような意味があるのか、より具体的な検討が不可欠であると言えよう。

また、二つめとして、社会学的に現在の事実を現象面から共時的に捉え、墓を通して家族、夫婦関係を変化を探ることも必要であると思われる。特に、今日の墓〈遺骨〉を巡る問題には、旧来の祖先崇拝、家族中心をもとにした葬送から抜けだした、新しい個人本位への葬送への転換という視点、また、家族のなかの人間関係の変化を見逃すことができないと言える。その意味では、個人のこころの問題と、家族、社会との関わり方を視野に入れて考えていかなければならないと言えよう。